

氏 名	大 島 襄 二 おお しま じょう じ
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	論 文 博 第 69 号
学位授与の日付	昭 和 46 年 5 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	水産養殖業の地理学的研究

(主 査)
論文調査委員 教 授 織 田 武 雄 教 授 赤 松 俊 秀 教 授 池 田 義 祐

論 文 内 容 の 要 旨

水産業は云うまでもなく、海洋・湖沼などの水界に産する動植物を採捕する産業であるが、同じく第一次産業に属する農業や畜産業とは異って、掠奪産業と呼ばれるように、水産業の場合には、自然に発生し成育した水産資源をただ採捕するにすぎない。そのため、しばしば濫獲によって資源の枯渇をまねきやすいのであるが、近年、水産資源を人為的に保護・増殖する水産養殖業の発達によって、水産業においてもようやく或る程度まで、生産の安定性を確保し得るようになった。ことに水産資源の減少によって、急激に衰退しつつあるわが国の沿岸漁業にとっては、水産養殖業への転換は今後ますます大きな意義を有すると思われる。

本論文は、この水産養殖業という新しい産業形態を、それが立地する地域との関連において分析し、わが国における水産養殖業の分布と発達過程を地理学的に考察したものであり、総論6章と各論12章より成る。

著者はまず総論において、水産養殖業の総括的展望を試み、第1・2章では、水産養殖業の立地条件として、水温・水質・水深・栄養塩類・プランクトンなどの漁場の自然的条件と、水産養殖業が産業として成立し得るための労働力・資本・市場などの社会的経済的条件について論じている。第3章では、わが国の水産養殖業の沿革について述べ、明治時代から真珠・カキ・ノリなどの養殖業の発達はみられたが、しかし水産養殖業がひろく企業化され、沿岸漁業の衰退を補うために、全国的に適地適種の地域的拡大をみるに至ったのは、戦後の新しい傾向であることを指摘し、第4章では、沿岸漁村において、養殖生産高が全漁獲高の過半を占める「養殖漁村」の全国的な分布について考察し、さらに世界との比較のために、第5章ではわが国の、第6章では世界の主要な水産養殖業について概観している。

後篇の各論では、上記の養殖漁村において水産養殖業がどのようにして取入れられ、また発達したかを、真珠養殖業とハマチ養殖業をとくに対象として比較検討している。すなわち第7・8章では、今日の真珠養殖業はもはや単一漁場において一貫養殖されることはなくなり、作業行程に対応して、母貝養殖漁場・

避寒漁場・仕上漁場などの諸漁場が、それぞれの自然的条件を選んで地域分化するようになり、またこのことが真珠養殖業の全国的拡大を促進せしめたと論じている。これに対して第9章では、戦後急速に発達したハマチ養殖業が、最大市場の京阪神市場を中心として同心円的な分布を示すばかりでなく、市場の近接に優さる内海型と、魚体の発育の早い外海型とに区別されることを、内海型の香川県、外海型の高知県の漁場について例証している。

第10章以下は、著者が各地の水産養殖業について行った実態調査の記載である。すなわち第10章では、真珠養殖業の発祥地であり、わが国の水産養殖業の先進地域である三重県英虞湾における真珠養殖技術の変遷と、それにともなう地域構造の変化を、農業や労働力との関連において分析し、第11章では、水産養殖業の競合による変容地域として、同じく三重県の的矢湾において、カキ養殖から真珠養殖、さらに現在ではノリ養殖に移行した過程を追求している。また第12章では、四国南西部の沿岸には、海洋のわずかな自然的条件の相違に依りて、真珠養殖業がハマチ養殖業のいずれかを主とする養殖漁村が並存し、従ってそれによって、漁村の性格も自ら異なることを明らかにしている。

しかし自然的条件には恵まれていても、その地域の歴史的、経済的關係によって、水産養殖業の発達がみられるとは限らない。たとえば第13章に記された長崎県大村湾東岸では、藩政時代から天然真珠の採取が行われ、今日でもわが国有数の真珠養殖地となっているが、これに対して西岸では歴史的伝統を欠き、経験にも乏しいため、近年、真珠養殖業が着手されたが、業者の乱立によって漁場は荒廃して不振の状態にあるという。また第14章の駿河湾沿岸については、北部の清水・沼津地区の工業化の進展と、伊豆半島南部では温暖な気候を利用した収益性の高い促成栽培農業の発達によって、沿岸各地において一時操業された真珠養殖業も衰退したことを述べている。さらに第15章では漁業よりも農業を主とする沓岐沿岸、第16章では対馬大船渡、第17章では高知県柏島の真珠養殖業について記載しているが、これらの地域では外部資本によって真珠養殖業が導入されたにもかかわらず、農業や他の沿岸漁業が盛んなために、地元民は養殖業に関心を示さず、これに従事する者が少ないこと、また第19章の高知県宿毛湾沿岸では、最も収益に富む真珠母貝アコヤガイの稚貝を大量に採取し得るために、かえって真珠養殖業の発達を阻害していることを指摘している。

なお結論として、著者は水産養殖業が近代産業として成立するためには、需要と供給との均衡關係に立って、経営体の適正数や適正規模が考えらるべきであるとし、経営体の無計画な増加は、過当競争をまねき、養殖業が沿岸漁業の危機を救う対策とはなり得ないと結んでいる。

論文審査の結果の要旨

水産資源を人為的に保護・育成する水産養殖業は、水産業としては最も合理的、近代的な形態であり、近年、水産資源の減少によって衰退の傾向がいちじるしいわが国の沿岸漁業にとっては、水産養殖業はその救済策としても重要な意義を有し、たとえば1957年以後の10年間に、水産養殖の全生産額は6倍以上に増大している。このように水産養殖業は、戦後とくに急速な発達を示し、また全国的に拡大されたのである。しかし新しい産業形態であるため、水産養殖業の現状を全国的な立場から考察した研究はこれまでみられなかったが、戦後早くからその研究に着手した著者は、各地の漁村を採訪した結果に基づいて、そ

れぞれの地域における水産養殖業の立地と発達過程を地理学的に詳細に究明し、また水産養殖の業種による地域分化や、競合或いは並存関係についても新らしい見解を示していることは、わが国の地理学の研究に大きな貢献をなしたものとして、その業績は高く評価し得る。

ただ、水産養殖業については、従来ほとんど組織的な研究がみられなかったために、本論文においても、著者の研究のいわば素地づくりにあたる実態調査の記載にやや偏しており、また著者の調査時にはまだ余り問題になっていなかった海水汚染、漁村の労働人口の流出など、なお論ずべき問題も残されている。しかしこれらは今後の著者の研究に俟つとして、著者が本論文において、わが国の水産養殖業について総合的な研究を行った努力は誠に多とさるべきであり、また水産養殖業の発達にとっても、寄与するところが少なくないであろう。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。